

明清交替期の督師幕府——揚州督師史可法幕府をもとに——

辻 原 明 穂

目次

はじめに

第一章 督師幕府とは

第一節 督師幕府研究の問題点

第二節 督師の権限

第二章 督師史可法幕府の成立

第三章 督師史可法幕府の幕僚とその役割

第一節 「書記」

第二節 「軍務」

第三節 「人材の確保」

第四章 督師幕府の歴史的位

置
わりに

はじめに

中国幕府制度の研究には、たとえば秦代から漢代では將軍の幕府、六朝時代では都督府⁽¹⁾、唐代から五代では藩鎮の幕府⁽²⁾、宋代では安撫使・招討使・制置使・宣撫使・轉運使などの幕府⁽³⁾、元代では總管府など⁽⁴⁾、清代では總督と巡撫などの幕府を扱った研究がある⁽⁵⁾。

ここで問題となるのは、中国幕府制度の研究において、明代が抜け落ち、空白期となっていることだ。一九七一年に発表された繆全吉『清代幕府人事制度』（中國人事行政月刊社）では、清代の幕府に着目し、總督と巡撫の衙門を幕府とする見方が打ち出された。總督と巡撫は、明清時代を通じて置かれた地方官で、両者をあわせて督撫という。督撫が持つ幕府を督撫幕府といい、それは繆氏によつてはじめて注目された。以後、督撫幕府の研究は、繆氏の研究を下地として多くの研究者によつて發展されるが、研究対象となるのは清代、とりわけ晚清（ここでは、一八五一年の太平天國の乱以降を指す）⁽⁶⁾の督撫幕府が大半で、明代督撫幕府はほとんど無視されたまま現在にいたっている⁽⁷⁾。

二十一世紀にいたりやつと明代の幕府へ視点が向けられ、何朝暉「明代知県幕友小考」、同「明代県政研究」、趙克生「朱元璋戰時幕府略論」⁽⁸⁾、陳宝良「明代幕賓制度初探」⁽⁹⁾、呂靖波「胡宗憲幕府人物考略」⁽¹⁰⁾などの研究が登場するものの、督撫幕府という存在を扱った研究ではない。幕府研究で空白期となっている明代の幕府を明らかにするためには、まず、明清時代に設置された督撫に着目し、かれらが持つ督撫幕府を分析する必要がある。督撫の性質は明代から清代へ受け継がれており、幕府の性質も、清代督撫幕府は明代督撫幕府を繼承していると予測される。つまり幕府制度は明代から清代へ連続してとらえる必要があり、先行研究のように清代督撫幕府のみを扱って、明清督撫幕府の制度を明らかにしようとしても、限界があるのではなからうか。

そこで前稿「明代督撫幕府の構造と特色——嘉靖年間の胡宗憲幕府を手掛りとして」¹⁴では、明代中期以降の督撫幕府に着目した。明代、宣德年間（一四二五年～一四三五年）頃から、督撫が臨時に派遣され、厳然たる地方官として各地の問題を処理した。地方で事件発生とあらば督撫の派遣となるが、現地で幕府を開いた彼らに昔の使職¹⁵のような辟召権（人材を招いて官職に就ける権利）はなかった。¹⁶派遣先の布政使司・按察使司・都指揮使司および総兵官系統の武官は自動的に督撫指揮下に入るが、督撫は直属の部下を帯びずに現地へおもむくため、円滑な任務遂行には腹心となる幕僚を集めねばならず、現地で個人的に人員招聘を行なうのは必然のことであった。こうして幕府には山人、布衣、生員など多様な人員が集結し、幕僚となったが、明代以前の幕府で機能した辟召制は明代へは受け継がれずに断絶し、幕僚は招聘されるのみにとどまった。

督撫の出現により、明代から督撫幕府という新しい幕府制度の流れが始まる。この帰着点は清代の督撫幕府と考えられるが、明代の督撫幕府が何の変化も無しにそのまま清代へつながつたのではない。督撫は設置当初から存廃をくりかえして一定せず、明末、とくに万暦年間（一五七二年～一六二〇年）頃から督撫に準じた別の官職も置かれ、こうした錯綜状況が次第に整理されて清代の督撫に継承されていく。そこで本稿では、錯綜する明末にあらわれた督撫幕府の変種のような、軍事に特化した督師幕府の構造と特徴を明らかにし、督撫幕府研究の一助としたい。

第一章 督師幕府とは

第一節 督師幕府研究の問題点

明代の督撫は地域ごとに存廃を繰り返し、一定したのではなく非常に流動的であった。¹⁷このような督撫制度の中から、明末、天啓年間（一六二二年～一六二七年）に、軍事面で督撫の上位に立つ指揮官として督師が現れる。督師は『大

明会典』や『明史』職官志などに明確な規定は見られないが、臨時的な職で部下を持たず現地へ赴任するため、現地で幕府を開き幕僚を集めたと考えられる。督撫が現地で設ける執務機関を督撫幕府と称するように、本稿では督師が現地で持つ執務機関を督師幕府と呼ぶこととする。

陳宝良氏の「明代幕賓制度初探」では、明代に存在した幕府をいくつか挙げて紹介している。陳氏の論に、「地方衙門では、上は督師・経略・総督・巡撫、下は府・州・県の各衙門にいたるまで、みな幕賓を招聘し、はなはだしきにいたっては武将にも幕賓を招聘するものがあつた。督師は幕府を開いてみずから人材を招聘し、明末においては常にその例が見られる。督師孫承宗のごときは、専門に占天・察地・詔審・偵諜・異材劍・大力などの六館を設け、天下の豪傑を招いた。その中で最も著名なものは諸生茅元儀で、賛画に充てられて幕府に在った。また督師史可法は、揚州に幕府を開いて礼賢館を設置し、四方から智謀の士や天文・陰符（まじない）・遁甲（目くらましの術）などの諸術に通じたものを集め、一時、幕客が群がり集まり、りっぱな人材がたくさんいた。」とある。⁽¹⁸⁾ここで陳氏は督師幕府の例として孫承宗幕府と史可法幕府をあげているが、幕府紹介にとどまり幕府構造の分析はおこなっていない。

孫承宗幕府に比べて史可法幕府は比較的史料が豊富に残っており、また先行研究にも何齡修「史可法揚州督師期間的幕府人物（上・下）」⁽²⁰⁾や陳麟徳「史可法幕賓梁以樟在宝応」⁽²¹⁾などの研究がある。⁽²²⁾陳麟徳氏は史可法幕下で活躍した梁以樟という人物に焦点をあて、その活躍を分析しているが、ただ残念なことに参考史料・参考文献の提示がなされていない。

何齡修氏の研究では、地方志・個人の文集等、膨大な史料をもとに幕府人員の分析をおこない、百人もの人物の経歴を述べている。百人を五つのグループに分け、その内訳は、一―二十九、史可法とともに揚州で死去した者。三十―三十八、揚州では死去せず、のちに反清あるいは復明運動をおこなったために死去した者。三十九―七十一、清朝に出仕せず、明朝への忠節を尽くした者。七十二―八十、清朝に降伏した者。八十一―百、不鮮明な点が多い者、という区

分になっている。非常に多くの史料から幕府人物を百人も探し出した点は評価すべきであるが、その一方で問題点も多く存在する。何齡修氏の研究の問題点をまとめると以下の三点が指摘できる。

一、幕府制度に関する先行研究をあげておらず、明代以前の幕府から、明代を経て清代へ継続する幕府制度における史可法幕府の位置が明確にされていない。

二、幕府人員の定義が明確ではない。

三、幕府人員の役割が不鮮明である。前述のように、何齡修氏は幕府人員を五つのグループに分類しているが、役割による区分ではない。キリのよい数、百人に無理に収めたといえないこともなく、姓名さえ曖昧な人物も多く存在する。幕府人員の経歴に関しては、人物事典の様相を呈しており、幕府中における各人の役割が不鮮明になっている。また史可法は幕府中に礼賢館という館舎を建て、そこに人材を集めたとあるが、この礼賢館の人材を他の（礼賢館以外の）人員と同等に扱ってよいのか、疑問が残る。

以上の何齡修氏の問題点をふまえて、本稿では再度史可法幕府の構造を見ていく。史可法幕府に着目することで、明清交替期の幕府はどのような姿であったのかを考察し、清代へ継続する幕府制度の中における督師幕府の位置を検討したい。

第二節 督師の権限

幕府の分析に入る前に、督師とはどのような職であるのかを確認したい。督師は明末の天啓年間～崇禎年間に集中的に設置された職である。設置当初は内閣大学士が任命されていたが、次第にそれ以外の者も督師となる例がでてくる。任命されるものは、辺事に通じている者、あるいは督撫経験者、督撫在任中の者等で、多くは兵部尚書（実職でない者

もあつたが）を兼任している者が拔擢された。⁽²³⁾

督師が赴任してくるとその地方の指揮系統はどのようになるのか。崇禎年間、流賊張獻忠等を討伐するために湖北・四川方面の督師となつた楊嗣昌の例を見てみよう。次の史料は、崇禎十二年（一六三九）八月二十五日に、楊嗣昌が奉じた聖旨の一部である。『楊嗣昌集』卷三十五、疏、君恩眩世難逢臣罪沒齒無怨疏には以下のようにある。

（前略）…さらに尚方劍を賜いて師を督させ、各省の兵馬、總督・巡撫・鎮守から以下はみな督師の節制に従い、副総兵官・參將以下はすぐに賜つた劍をもちいて仕事に従事せよ。その勅印等の項目については、速やかに用意するよう該當の衙門に知らせよ。

（前略）…仍賜尚方劍督師、各省兵馬、自督・撫・鎮以下俱聽節制、副・參以下即以賜劍從事。其勅印等項、速与辦給。該衙門知道。⁽²⁴⁾

「各省の兵馬、總督・巡撫・鎮守以下はみな督師の節制に従い」という部分から、督師は督撫をも傘下におさめ、全軍を指揮したことがわかる。

次に督師の権限はどうか。『明史』卷二百五十、孫承宗伝は以下のように記す。

〔王〕在晋が既に去ると、〔孫〕承宗はみずから督師を請願した。〔熹宗天啓帝は〕詔して閔防の詔勅を与え、元の官職のまま山海関および、薊州・遼東・天津・登州・萊州の軍務を監督し、自らの裁量で事を処理し、宮中からの命令を逐一うけないこと（便宜行事、不從中制）を認め、また〔閔〕鳴泰を遼東巡撫とした。〔孫〕承宗は職方主事の鹿善繼と王則古を招いて賛画とし、金庫の金八十万を持ち出すことを請願した。熹宗天啓帝は特別に門まで出向き、尚方劍と坐蟒（宰相が恩寵として与えられる礼服）を与え、閔臣たちは孫承宗を崇文門の外まで見送った。〔孫承宗は〕山海関に到着すると、総兵官江応詔に軍制を定めさせ、僉事〔袁〕崇煥に営舎の建築を、廢將李秉誠に火器の整備を、賛画〔鹿〕善繼と〔王〕則古には軍

の蓄えの管理を、沈槩と杜応芳には鎧や刀槍の修繕を、司務孫元化には砲台の建築を、中書舍人宋猷と羽林經歷程崙には馬の取引の管理を、広寧道僉事万有孚には樹木伐採の指揮を命じた。また遊撃祖大寿には覺華島で金冠の補佐を、副將孫諫には前屯で趙率教の補助を、遊撃魯之甲には難民救済を、參將楊應乾には遼東の住人から募兵することを命じた。

在晋既去、承宗自請督師。詔給関防敕書以原官督山海関及薊・遼・天津・登・萊諸処軍務、便宜行事、不從中制、而以鳴泰為遼東巡撫。承宗乃辟職方主事鹿善繼、王則古為贊画、請帑金八十萬以行。帝特御門臨遣、賜尚方劍、坐蟒、閣臣送之崇文門外。既至関、令総兵江応詔定軍制、僉事崇煥建営舍、廢將李秉誠練火器、贊画善繼、則古治軍儲、沈槩、杜応芳繕甲杖、司務孫元化築礮台、中書舍人宋猷、羽林經歷程崙主市馬、広寧道僉事万有孚主採木。而令遊撃祖大寿佐金冠於覺華、副將陳諫助趙率教於前屯、遊撃魯之甲拯難民、副將李承先練騎卒、參將楊應乾募遼人為軍。

孫承宗は山海関および薊州・遼東・天津・登州・萊州等の軍務を管轄して清軍の侵入を防いだ。⁽²⁵⁾ 当時これと重なる管轄区域を持つものには、薊遼総督、山東巡撫、順天巡撫、天津巡撫、保定巡撫、遼東巡撫があつた。⁽²⁶⁾ 薊遼総督は薊州と遼東を、山東巡撫は山東、順天巡撫は順天、天津巡撫は天津、保定巡撫は保定、遼東巡撫は遼東を管轄したが、これらを督師孫承宗と比較すると、すべて督師の管轄区域に含まれる。つまり、督師は複数の督撫の管轄区域を包含する広範な統轄するものであつたことがわかる。

督師の地位が非常に高かつたことを示す史料として、『明史』卷二百五十九、范志完伝には以下のような記載がある。
 「崇禎十二年」六月、〔范志完は〕銜をあらためられて謹んで督師を命ぜられ、薊州・遼東・昌平・通州等の軍務を総督し、登州・天津の巡撫や鎮守を節制した。遼東の事態が危急となれば、中・後・前屯に移駐させ、山海関内の事態が危急となれば、夜を徹してかけつけて入援し、三協（薊鎮の東協・中協・西協）に危険があれば、薊州・昌平の二人の総督と協力し、策略を通じて示し合わせた。時に山海関の内外にはともに二総督を設置し、山海関外のものには督師の銜を加えて地位と名望をと

りわけ尊いものとし、また昌平・保定には二總督を設置したので、ここで千里の内に四人の總督が存在することになった。六月易銜欽命督師、總督薊・遼・昌・通等處軍務、節制登津撫鎮。遼事急、則移駐中・後・前屯、関内急、則星馳入援、三協有警、則会同薊・昌二督、并力策応。時関内外並建二督、而関外加督師銜、地望尤尊、又於昌平・保定設二督、於是千里之内有四督臣。

ここにある「地位と名望をとりわけ尊いものとし（地望尤尊）」という記載から、督師の身分が督撫より高いものであることがわかる。

明末の危急の状況下で、臨機応変に軍を指揮して任務を遂行するためには、督撫では権限が足りなかった。そこで、広大な領域を統轄し活動できる督師が登場し、皇帝自身から尚方劍や坐蟒を賜り、自らの裁量で事を処理し、宮中からの命令を逐うけない「便宜行事、不從中制」、という大きな権限を与えられた。⁽²⁷⁾それは「地望尤尊」とあるように、軍事を担う文臣としては明代で最高位に位置するものであったといえる。

第二章 督師史可法幕府の成立

ではここで史可法幕府に焦点を当てて、具体的に検討してみたい。まず、史可法の経歴を簡単に述べておく。

史可法は祥符（河南省開封市）の人で大興県（北京市）に籍をおく。字は憲之で、号は道鄰。万曆三十年（一六〇二）十一月初四日に生まれる。⁽²⁸⁾崇禎元年（一六二八）四月に進士となり、⁽²⁹⁾のち西安府推官、戸部主事、員外郎、郎中等を歴任。⁽³⁰⁾崇禎八年（一六三五）八月、總理廬象昇に従い各地の農民反乱を鎮圧、崇禎十年（一六三七）には右僉都御史に抜擢され、安慶（安徽省安慶市）、廬州（安徽省合肥市）、太平（安徽省黃山市）、池州（安徽省池州市）及び河南、湖広（湖北省・湖南省）、江西などを巡撫した。⁽³¹⁾崇禎十六年（一六四三）七月、南京兵部尚書熊明遇が辞めたので、史可法が

それにかわつて南京兵部尚書となる。⁽³²⁾

崇禎十七年（一六四四）三月、反乱軍の李自成等が北京を陥落させ、崇禎帝は自殺する。⁽³³⁾ここで北伐を考えていた史可法は京師陥落の報を聞き、南京に軍を引き返した。南京兵部尚書史可法、戸部尚書高弘図らは潞王朱常芳を立てて新皇帝としたが、鳳陽総督馬士英等に反対されたため、同年五月、やむなく福王朱由松を立てた。⁽³⁴⁾朝廷で、誰を出鎮させるか議論になった際、馬士英は軍を督する者として史可法以外に誰がいるだろうかと言ひ、⁽³⁵⁾史可法を朝廷の外へ出す。同月、史可法は太子太保に進み、兵部尚書と武英殿大学士を兼掌する。⁽³⁶⁾「督師輔臣之印」⁽³⁷⁾を持って出鎮し、⁽³⁸⁾史閣部と称した。⁽³⁹⁾

弘光元年（一六四五）正月、清軍の愛新覺羅多鐸が李自成を打ち破つて入関すると、李自成は北京から逃げ出した。⁽⁴⁰⁾同年四月には、清軍は揚州城（江蘇省揚州市）に迫る。多鐸は数回にわたつて降伏を勧める書状を送つたが、史可法はこれを拒否。同月二十五日、史可法はついに捕えられ殺される。⁽⁴¹⁾享年四十四歳。⁽⁴²⁾南明政権の唐王隆武帝からは忠靖、⁽⁴³⁾清の乾隆帝からは忠正とおくり名された。⁽⁴⁴⁾

史可法が対清軍の督師として赴任するのは崇禎十七年五月からである。そのときのことを史可法の幕僚の一人である応廷吉の著した『青燐屑』上巻は次のように記載する。

〔崇禎十七年〕五月、東閣大学士兼礼部尚書高弘図、東閣大学士兼兵部尚書史可法、東閣大学士兼兵部尚書で鳳陽の軍務を督する馬士英、宦官韓贊周・盧九德、吏科給事中李沾、浙江監察御史左光先等とともに福王を擁立し南京で即位させ、弘光と改元した。：（中略）：。（史可法は）請願して命令を受け、数日たつてから遂に太子太保、兵部尚書、武英殿大学士に昇進して淮安府（江蘇省淮安市）と揚州府（江蘇省揚州市）の軍を監督した。

五月、閣臣高弘図、枢臣史可法、督臣馬士英、内監韓贊周・盧九德、科臣李沾、台臣左光先等共擁福藩世子正位南京、改元弘光。

…(中略)…願受命。越数日、遂進太子太保、兵部尚書、武英殿大學士、視師淮・揚。

史可法が督師の任にあったのは、崇禎十七年五月から弘光元年四月までのわずか約十一ヶ月間で、この期間がすなわち督師幕府の開府期間となる。また『史可法集』史可法別伝には、

〔崇禎十七年五月〕十二日、ついに〔史可法は〕上疏してみづから揚州に師を督することを請願した。〔崇禎帝は〕それを許可し、詔して史可法に自分の裁量で事を処理させて、各鎮はみな〔史可法の〕命令にしたがうようにさせた。

十二日、遂上疏自請督師揚州。許之、詔令以便行事、各鎮並聽節制。

とあり、現地の各鎮は督師史可法の指揮下に入ったことがわかる。

史可法は淮安府と揚州府を管轄したが、拠点となる幕府はどこにあったのか。溫睿臨『南疆逸史』卷五、列伝第一、史可法には以下のようにある。

史可法はついに揚州にとどまり、幕府を開いて事を管理した。

可法遂留揚州、開幕府治事。

『南疆逸史』卷五、列伝第一、応廷吉にも、

史可法は内閣大学士兼兵部尚書の身分で師を督し、揚州に幕府を開いた。

史可法以閣部督師、開府揚州。

とある。これらの記述から幕府は揚州にあったことがわかる。常に揚州に駐屯し続けたわけではなく、南京に戻ったり、泗州(安徽省宿州市)に駐屯したこともあったが、基本的には揚州を拠点としていたと考えられる。

崇禎十七年五月、史可法は総兵官黃得功・高傑・劉沢清・劉良佐を用いて藩屏とし、四鎮を設けることを朝廷に請願し認められた。⁽⁴⁵⁾計六奇『明季南略』卷一、史可法請設四鎮には以下のようにある。

その四鎮とは、すなわち淮安・揚州・徐州・泗州・鳳陽・寿州・滁州・和州に設置し、各自、その場で活動させた。総兵官劉沢清を東平伯に封じて、淮海を管轄させた。淮北に駐屯して、山陽・清河・桃源・宿遷・海州・贛榆・塩城・安東・邳州・睢寧の十の州県はこれに隸属することとし、山東一帯の招討（降付を招懷し、離反を征討する）の事を処理させた。総兵官高傑を興平伯に封じて、徐州・泗州を管轄させた。泗水に駐屯して、徐州・蕭県・碭山・豊県・沛県・泗州・盱眙・五河・虹県・靈璧・宿州・蒙城・亳州・懷遠の十四の州県はこれに隸属することとし、河北・河南の開封・歸德一帯の招討の事を処理させた。総兵官劉良佐を武昌伯に封じて、鳳陽・寿州を管轄させた。臨淮に駐屯して、鳳陽・臨淮・穎上・穎州・寿州・太和・定遠・六安・霍邱の九の州県はこれに隸属することとし、河南の陳州・杞県一帯の招討の事を処理させた。靖南伯黃得功を昇進させて靖南侯とし、滁州・和州を管轄させた。廬州に駐屯し、滁州・和州、全椒・來安・含山・江浦・六合・合肥・巢県・無為州の十県はこれに隸属することとし、光州・固始一帯の招討の事を処理させた。

其四鎮則設于淮・揚・徐・泗・鳳・壽・滁・和、各自画地。封総兵官劉沢清東平伯、轄淮海、駐于淮北、以山陽・清河・桃源・宿遷・海州・贛榆・塩城・安東・邳州・睢寧十州県隸之、經理山東一帯招討事。封総兵官高傑興平伯、轄徐・泗、駐于泗水、以徐州・蕭県・碭山・豊県・沛県・泗州・盱眙・五河・虹県・靈璧・宿州・蒙城・亳州・懷遠十四州県隸之、經理河北・河南開・歸一帯招討事。封総兵官劉良佐武昌伯、轄鳳・壽、駐于臨淮、以鳳陽・臨淮・穎上・穎州・寿州・太和・定遠・六安・霍邱九州県隸之、經理河南陳・杞一帯招討事。晋靖南伯黃得功爲靖南侯、轄滁・和、駐于廬州、以滁州・和州、全椒・來安・含山・江浦・六合・合肥・巢県・無為州十県隸之、經理光・固一帯招討事。

ここで史可法は、四人の総兵官を用いて各地に配置し、藩屏としたことがわかる。

崇禎十七年九月、史可法はまた請願して、清軍と対峙するために自分と一緒に出征する文武の官員を定めた。『青燐屑』上巻には次のように記す。

武英殿大学士兼兵部尚書の史可法は印を七顆請願した。督餉道員一顆を設け、原任の副使黄鉉掌にこれを担わせた。監軍道印一顆を設け、原任の副使高岐鳳にこれを担わせた。行軍兵部職方司郎中一顆を設け、黄日芳にこれを担わせ、官がおなじ者は秦士旂、主事何剛、施鳳儀等であった。監餉同知一員を設け、知県吳道玉にこれを代理させ、印は無いものとした。監紀推官印一顆を設け、前後して監紀推官を任された者は、原任の僉事陸遜之、原任の知県応廷吉、官が同じ者は劉景綽、梁以樟、呂彥良等であった。出征に従い功績をたてるものは原任の翰林院庶吉士吳爾壘、滁泗兵備石啓明、開〔封〕府推官李長康、贊画通判張鐸、知県殷垲、支益等で、參贊等の官は設置せず、侯方岳が後に至ったときに桃源知県とした。督師大庁副總兵印一顆は李正春にこれを担わせた。督師中軍旗鼓印一顆は馬應魁にこれを担わせ、官が同じ者は翟天葵、陶正明等であつた。督師前軍商功參將一顆は汪一誠にこれを担わせた。……（後略）。

閣部請印七顆、設督餉道員一顆、以原任副使黄鉉掌之。監軍道印一顆、以原任副使高岐鳳掌之。行軍兵部職方司郎中一顆、以黃日芳掌之、同其官者為秦士旂、主事何剛、施鳳儀等。監餉同知一員、以知県吳道玉署之、無印。監紀推官印一顆、先後掌其印者為原任僉事陸遜之、原任知県応廷吉、同其官者為劉景綽・梁以樟・呂彥良等、從征立功為原任翰林院庶吉士吳爾壘・滁泗兵備石啓明・開〔封〕府推官李長康・贊画通判張鐸・知県殷垲・支益等、參贊等官不及備載、侯方岳後至、以為桃源知県。督師大庁副總兵印一顆、以李正春掌之。督師中軍旗鼓印一顆、以馬應魁掌之、同其官者為翟天葵・陶正明等。督師前軍商功參將一顆、以汪一誠掌之。……（後略）。

ここで定められた官員と、前述の各地に配置された四鎮が史可法指揮下の正規の官僚系統となり、史可法の統治が及ぶ範圍とは、揚州府・淮安府および四鎮がおさめる地域ということになる。一方、幕府とは正規の官僚系統とは別個に存在する私的なものであり、したがって督師幕府の構成要素は以下のA、Bのように推測できる。

A、幕主……幕府のリーダー。督師史可法を指す。幕主は二つの顔を持ち、ひとつは公的な官僚機構の一員として、

その頂点に立つ督師という顔。もうひとつは私的な幕府の頂点に立つ幕主としての顔である。

B、幕僚……幕主と個人的なつながりを持つ者の集団。幕主との個人的・人格的結合によって入幕する。入幕方法はおもに幕主からの招聘で、①官に就いている者（正規の官僚機構の中から、幕府に参加する）、②官に就いていない者の二種が存在する。一人の幕僚が複数の役割を兼任している場合もあるが、史可法幕府の幕僚は、「書記」「軍務」「人材の確保」の三種の役割に大別できる。

史可法幕府にはどのような人物がいたのだろうか。次章ではBの幕僚を役割ごとに節に分けて見ていきたい。

第三章 督師史可法幕府の幕僚とその役割

本稿では主な幕僚を役割ごとに数人ずつ説明するにとどめた。第一節では「書記」、第二節では「軍務」、第三節では「人材の確保」を扱う。人名は五十音順とした。なお、ここでは史可法幕府内での役割という意味で、「書記」、「軍務」、「人材の確保」のように「」付きで記載する。

第一節 「書記」

「書記」とは文字通り、文書作成をおこなう幕僚である。史料から文書作成を担っていたことがわかる者を二人（王之楨、黃日芳）、史料中に書記（顧起龍、龔之厚、陸曉、唐経世）、記室（李標）と記載されている者をそれぞれあげた。⁽⁴⁶⁾

王之楨 万曆四十一年（一六一三）に生まれ、康熙四十二年（一七〇三）に死去する。字は筠長。塩城（江蘇省塩城市）の人。在幕時の身分は貢生。『光緒塩城県志』卷十、人物、王之楨には以下のようにある。

東閣大学士兵部尚書の史可法が揚州に幕府を開くと、王之楨は軍前に行き、十個の策略を陳述した。そこで遂に〔史可法は王之楨を〕幕中に招聘し、その場にふさわしい対策を書いた文章や、軍事上の文書、檄文をつかさどらせ、それらの多くは王之楨の手によって作成された。

東閣大学士兵部尚書史可法開府揚州、楨詣軍前陳十策、遂辟置幕中、掌機宜文字、軍書羽檄、多出其手。⁽⁴⁷⁾

史料中に書記や記室といった表現は見られないが、軍事上の文書や檄文などの作成を担っていたことがわかる。さらに『史可法集』附録、跋史師相乞聞詠敘には次のように記されている。

私（王之楨）は師相（史可法）にしたがつて維揚（揚州）の幕府に在った。ときに軍務は煩雑であつたので、決して〔多忙な〕師相には会わず、古人の文章を整理していた。∴（中略）∴。私が幕府に在るとき、かつて奏議數十卷を授かり、江与右、歐陽憲万に命じて分担して校讎させた。

余從師相在維揚幕府、時軍務旁午、絕不見師相理古人文字。∴（中略）∴。余在幕府、曾授奏議數十卷、命江与右、歐陽憲万分任讎較。

史可法幕府の書記には王之楨以外に江与右や歐陽憲万⁽⁴⁸⁾といった人々がおり、ともに上奏文数十卷をまとめる作業をしていたことがわかる。

黄日芳 生没年は不詳。字は蠡源。廬陵（江西省吉安市）の人。崇禎四年（一六三一）の進士。在幕時の身分は兵部職方司郎中。弘光元年（一六四五）、清軍が揚州に迫った時、清の摂政王多爾袞は史可法に書状を送って投降を勧告するが、史可法は返書して投降を拒否する。史可法から多爾袞に送られた書状は「復摂政王」⁽⁴⁹⁾というもので、史可法一人によって作成されたのではなく、数名で分担して書かれたようである。誰がどの部分を書いたのかということに関しては明らかではないが、談遷『棗林雜俎』仁集、逸典、寓書史可法に、

史相国（史可法）は揚州に在った。清人の寓書がいうには、摂政王（多爾袞）は史相国に書状を送って、事をとりおこなうよう云々といった。みずから称している本朝という文字は抬頭し、史相国という文字は平行にした。黄色の紙に詔勅のように書き、また硃でその句に丸印をつけた。華亭（上海市）の包爾庚は沔陽（湖北省武漢市）の黄日芳にこれを見せた。〔黄〕日芳は崇禎四年（一六三一）の進士で、相国（史可法）が返書を書かせたところ、その文章は非常に激しいものであった。相国（史可法）は文章の余分な字句を削ったり潤色したりして言うことに、口論を要しないものである、と。そこで今、〔黄〕日芳はそのものと文案を刻した。

史相国在揚州、清人寓書云、摂政王致書史相国執事云云。自称本朝字抬出、史相国字平行、黄紙如詔勅、又硃圈其句。華亭包爾庚於沔陽黄日芳処見之。日芳庚辰進士、相国俾答書、詞頗峻。相国刪潤曰、不必口角也。今日芳刻其原草。⁽⁵²⁾

とあるように、黄日芳は「復摂政王」作成に関与していたことが記載されている。

顧起龍・龔之厚・陸曉・唐経世 四人とも生年、および在幕時の身分は不詳。一つの史料に四人記載されているため、ここではまとめてとりあげる。史可法とともに戦死していることから没年は弘光元年四月頃と推測される。『南疆逸史』巻五、列伝第一、史可法には以下のようにある。

その余の文武の軍の指揮官や役人で死亡した者は甚だ多かった。家人の史書、書記の顧起龍・龔之厚・陸曉・唐経世等も皆〔史〕可法に従って戦死した。

其余文武将吏、死者甚衆。家人史書、書記顧起龍・龔之厚・陸曉・唐経世等皆従可法死。

この記載から四人とも幕府の書記であつたといえる。ただ四人がどのような文書作成を担わされていたのかは明らかではない。

李標 生没年は不詳。字は子建。嘉善（浙江省嘉興市）の人。在幕時の身分は貢生。鄧之誠『清詩紀事初編』巻二、

李標に「〔李標は〕弘光元年（二六四五）、史可法が揚州に在った際、その招聘に応じた（弘光元年、応史可法揚州之聘）⁽³³⁾」と書かれており、弘光元年に史可法幕府に入幕したことがわかる。『南疆逸史』巻四十四、列伝第四十、逸士、李標には以下のようにある。

〔李標は〕戦策、戦略、軍律、営陣、壬遁（逃げる方法）など諸々の書物に精通していたので、内閣大学士兼兵部尚書の史可法は「〔李標を〕招いて記室とした。

精於戎機、戦略、軍律、営陣、壬遁諸書、閣部史可法辟為記室。

諸々の書物に精通していたため、幕府に招かれて記室となったことがわかる。

「書記」となった幕僚には、兵部職方司郎中（黄日芳）、貢生（王之楨、李標）、身分不詳の者（顧起龍・龔之厚・陸曉・唐経世）など、さまざまな人員がいた。入幕方法は基本的に幕主からの招聘であったといえる。身分不詳の四名にはどのような文書作成を任せていたか不明だが、黄日芳には多爾袞への書状作成を、王之楨には古人の文章や上奏文の整理を、李標にはおそらく戦策、戦略、軍律、営陣、壬遁に関する文書作成をさせていたと考えられる。前述したように、崇禎十七年九月、史可法がともに出征する官員を朝廷に請願して定めた際、黄日芳はそのメンバーに入っており、⁽³⁴⁾「書記」の中で唯一、兵部職方司郎中として公的な官僚機構の中から史可法幕府に参加している人物といえる。

第二節 「軍務」

では軍務に参加していた幕僚には、どのような人物がいるのだろうか。⁽³⁵⁾

閻爾梅

字は用卿、またの字を調梅。沛県（江蘇省徐州市）の人。万曆三十一年（一六〇三）九月に生まれ、康熙十八年（一六七九）に死去する。在幕時の身分は舉人。崇禎十七年（一六四四）十月頃、史可法は白洋河（江蘇省淮安市付近）に進駐したとき閻爾梅を招く。『清史稿』卷五百、遺逸一、閻爾梅伝には次のようにある。

〔閻爾梅は〕史可法の招聘におもむき、軍事に参加した。…（中略）…時に〔四鎮の一人であった〕興平伯高傑が総兵官許定国に殺され、河南は大いに乱れた。そこで〔閻〕爾梅はまた〔史〕可法に西に行つて乱れている河南をしずめるように説得したのである。

赴史可法之聘、参軍事。…（中略）…時高傑為許定国所殺、河南大乱、爾梅又説可法西行鎮撫之。⁵⁶

史可法に招聘されて幕府に入つて軍事に参加し、高傑死亡後に乱れた河南を安撫するよう史可法に助言もおこなっている。

何攀龍

字は雲甲。江都（江蘇省江都市）の人。生年は不詳。揚州が陥落した際に市街戦で死去しており、没年はおそらく弘光元年（一六四五）と推測できる。在幕時の身分は諸生。屈大均『皇明四朝成仁録』卷六、揚州死事伝には以下のようにある。

策略をもつてきて〔史〕可法の軍門を叩き、之〔策略〕を献上したので、〔史〕可法はその言をすぐれたものとし、留めて賛画と為して幕下に置いた。

以計策叩可法軍門献之、可法奇其言、留為賛画、置帳下。⁵⁷

この記載から策略を献上したことによって幕府に入り、賛画となったことがわかる。

吳易

字は日生。呉江（江蘇省蘇州市）の人。万曆四十年（一六二二）に生まれ、順治年間の初め、清軍が投降をすすめるが、拒否したため杭州で磔にされて死去。崇禎十六年（一六四三）に進士となるが、国政が乱れているのを見

て、官には就かなかつた。『明史』卷二百七十七、楊文驄に次のようにある。

福王政權の時、揚州で史可法に謁見したところ、〔史〕可法は呉易の才能をすぐれたものとして、上奏して兵部職方司主事を授け、自分の〔軍の〕監軍とした。

福王時、謁史可法於揚州、可法異其才、題授職方主事、為己監軍。

官に就いていない状態で史可法に出会うが、入幕すると同時に官に就けられたため、在幕時の身分は監軍といえる。

朱良諫 字は方来。桐城（安徽省桐城市）の人。生没年、および身分は不詳。四方を遊幕し、自分に合う場所はなかつたが、『道光桐城統修縣志』卷十、人物志、忠節、朱良諫に、

内閣大学士兼兵部尚書の史公（史可法）はその才能を聞いて、朱良諫を招き、軍事において多く参決（謀議などに参加し、話し合いの採決に加わる）にあずかつた。

閣部史公聞其才、延致之、軍事多与参決。⁽⁵⁸⁾

とあるように、史可法幕府に招かれて軍事に参与したことがわかる。

蔣臣 字は一個。桐城（安徽省桐城市）の人。生没年是不詳。⁽⁵⁹⁾監生で、崇禎年間に戸部主事を授かつたが、李自成の軍が京師を占領すると、蔣臣は京師から逃げ出した。朱彝尊『静志居詩話』卷十九、蔣臣には以下のようにある。

甲申（崇禎十七年）の寇難で、〔蔣臣は〕抜け道を通じて淮陽（揚州）に行き、史公道鄰（道鄰は史可法の号）に依つたところ、史公は〔蔣臣を〕留めて軍務に参与させた。

甲申寇變、問道走淮陽、依史公道鄰、史公留参軍務。⁽⁶⁰⁾

戦乱の中、逃げてきて史可法幕府に入り、軍務に関わつたことがわかる。

施鳳儀 字は公狄。嘉定（江蘇省蘇州市）の人。字は孟翔。生年は不詳。弘光元年（一六四五）四月、流れ矢に当

たつて死去する。崇禎十年（一六三七）の進士。崇禎年間に湖広武昌府推官となるが、後に戦乱を避けて南に逃げ、史可法幕府に入る。『光緒嘉定県志』巻十七、人物志二、忠節、施鳳儀には次のようにある。

内閣大学士兼兵部尚書の史可法は〔施鳳儀を〕推薦して兵部職方司郎中に拔擢し、軍務に参与させた。

閣部史可法薦擢職方郎中、賛画軍務。⁽⁶¹⁾

幕府での身分は兵部職方司郎中といえる。前述したように、崇禎十七年九月、史可法がともに出征する官員を朝廷に請願して定めた際、施鳳儀はそのメンバーに入っており、彼の場合、正規の官僚機構の中から幕府に入った者である。また『青燐屑』下巻には、

〔弘光元年四月〕二十一日、甘肅鎮の李栖鳳、監軍道の高岐鳳の軍がひきいる兵四千人が至ると、梁以樟、応廷吉、張鐸、施鳳儀、ならびに礼賢館の諸生はともに〔揚州〕城に入り守衛した。

二十一日、甘肅鎮李栖鳳、監軍道高岐鳳帥所部兵四千人至、梁以樟、応廷吉、張鐸、施鳳儀并礼賢館諸生俱入城守衛。⁽⁶²⁾
とあり、梁以樟、応廷吉、張鐸等とともに揚州城の守衛をしていたことがわかる。

「軍務」となった幕僚も、前述の「書記」と同じように、兵部職方司郎中（施鳳儀）、進士であっても官に就いていない者（呉易）、举人（閻爾梅）、諸生（何攀龍）、身分不詳の者（朱良諫や蔣臣）などがいた。入幕方法は史可法に招聘される以外に、戦禍を避けて逃げてきたり、献策したりして幕府に入るなどの方法があったといえる。また施鳳儀のように、公的な官僚機構の中から幕府に参加する者がいる一方で、呉易のように官に就いていない者が入幕と同時に官を授かり、公的な官僚機構に組み込まれていく場合もあった。

第三節 「人材の確保」

史可法幕府には、「書記」と「軍務」以外にもうひとつ忘れてはならない幕僚の役割がある。それは「人材の確保」であり、任されていたのは応廷吉という人物である。

応廷吉 字は斐臣。慈溪（浙江省寧波市）の人。天啓七年（一六二七）の挙人。徐州碭山（江蘇省徐州市）の知県

となる。崇禎十七年（一六四四）七月に、浙江監察御史左光先の推薦によつて淮安府推官となる。同年九月、史可法が出征する文武の官員を定めた際、応廷吉は監紀推官に任命され、以後、史可法に従つて幕府で活躍することになる。史料中で、史可法が応廷吉を招聘したという明確な記述は管見の限り見当たらないが、雷公・太乙・六壬の術数や天文などの学問を究めていた才能を史可法に見込まれ、幕府に招かれたものと推測される。十一月には、白洋河（江蘇省淮安市付近）に行つて史可法指揮下の総兵劉肇基の軍を監督する役目を果たした。弘光元年（一六四五）の初めには、興平伯高傑が倒れた際、史可法は高傑の兵が散逸することを心配し、応廷吉を派遣して高傑の兵を安撫させている。これらの役割を史可法幕下で果たしつつ、「人材の確保」という任務もになっていた。それを示す史料として、『史可法集』、史可法別伝には以下のようにある。

〔崇禎十七年五月頃、兵を率いて江北を掠めていた高〕傑が既に去ると、揚州は落ち着いた。公（史可法）はそこで揚州に幕府を開くと、はじめに札賢館を設置して、四方から智謀の士および天文・陰符（まじない）・遁甲（目くらましの術）の諸々の術に通曉している者を招いた。皆に食糧を与え、監紀推官の応廷吉に札賢館の事を管理させた。

傑既去、揚州以安、公乃開府揚州、首設札賢館、招四方智謀之士及通曉天文・陰符・遁甲諸術者、皆給廩餼、使監紀官応廷吉主其事。

史可法は揚州に赴任すると、間もなく札賢館というものをたて、その仕事を応廷吉に任せたことがわかる。⁽⁸⁸⁾ さらに『青燐屑』下巻には以下のようにある。

〔弘光元年〕泗州（安徽省宿州市）に駐屯するということが既に決まると、公（史可法）は応裴臣（応廷吉）に言った。札賢館の諸生はときには軍にしたがい、さらに河防もしており、それは非常に負担で、大変な苦勞となっている。今また〔揚州〕にいる札賢館の諸士全員が〔泗州〕に赴くことは重労働である。君（応廷吉）は〔札賢館の諸士たちの〕才能を評価して（すぐれた者を選び出し）、能力を量って官を授け、その功績に報酬をあたえてはどうか、と。よって四月二日において、督撫の衙門の左脇で札賢館の諸士を試験し、合格した嘉禾（江蘇省蘇州市）の帰昭、崑山（江蘇省蘇州市）の孫元凱等は甲、乙として、ならびに唐大章、唐妍、張大武、陸燧等には通判、推官、知県等の官を授けた。…（中略）…四月二十一日、甘肅鎮の李栖鳳、監軍道の高岐鳳の軍が率いる兵四千人が至ると、梁以樟、応廷吉、張鐸、施鳳儀ならびに札賢館の諸生はみな〔揚州〕城に入り守衛した。

屯泗之議既定、公（史可法）謂応裴臣曰、札賢館諸生隨軍有時、兼之河防多負勤苦、今又趨泗、是重勞也。君盍品定才識、量能授官、酬其積勳乎。因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱等為甲乙、並授唐大章、唐妍、張大武、陸燧等通判、推官、知県等官。…（中略）…四月二十一日、甘肅鎮李栖鳳、監軍道高岐鳳帥所部兵四千人至、梁以樟、応廷吉、張鐸、施鳳儀並札賢館諸生俱入城守衛。

札賢館の諸士を試験して甲、乙などのランクをつけ、通判などの職を与えていることがわかる。

では札賢館にはどのような人材が集められたのだろうか。それに関しては一一七頁の表（札賢館の人物）を参照されたい。史料から確認できる人物を五十音順で1～11まで表にまとめた。これを見ると、2 帰昭、4 胡如姓、6 張涵、7 張大武、8 唐妍、9 唐大章、10 陸燧らはみな、のちに官を授けられていることがわかる。功績によって官を与えられた

4 胡如甦に対して、2 帰昭、7 張大武、8 唐妍、9 唐大章、10 陸燧らについては試験をして甲、乙などを決め、知県などの官を授けた。試験がおこなわれたのは弘光元年四月のことで、揚州城陥落が間近に迫っており（史可法は同月二十五日に死去している）、このような差し迫った状況であつたからこそ、人材が求められたのであろう。

以上のことから、史可法幕府において礼賢館とは、人材をプールし、有能な者をのちに何らかの官につけて督師指揮下の地方官として配置するために一時的に置いておく場所であつたといえる。

第四章 督師幕府の歴史的位置

以上の分析をふまえたうえで、督師幕府は督撫制度の上にとどのよう位置づけられるのかを考えてみたい。史可法幕府の構成員を再度整理してみると、以下のようになる。幕府に入る方法は招聘、献策、史可法に謁見しにやってくる、戦禍を避けて史可法幕府に来る、という方法があり、幕僚の種類は「書記」「軍務」「人材の確保」の三種に大別された。次に、幕僚を①官に就いている者（正規の官僚機構の中から幕府に参加）、②官に就いていない者、の二種類に分けてみると、以下のようになる。

① 応廷吉（監紀推官）、黃日芳（兵部職方司郎中）、施鳳儀（兵部職方司郎中）

② 閻爾梅（举人）、王之楨（貢生）、何攀龍（諸生）、龔之厚（身分不詳）、顧起龍（身分不詳）、朱良諫（身分不詳）、蔣臣（身分不詳）、唐絳世（身分不詳）、陸曉（身分不詳）、李標（貢生）

ここで呉易（進士であつたが官についておらず、入幕と同時に兵部職方司主事を授かる）のみ①・②の分類に入っていないことに気づくだろう。呉易の場合、官に就いていなかったが、史可法が朝廷に上奏したことで、兵部職方司主事を授かり、公的な官僚機構に組み込まれて②から①へ移行している。こうした現象は、管見の限り督撫幕府には見られ

ない。その理由は前稿で考察したように、督撫には幕僚を招聘する権限しか与えられていなかったからだと考えられる。しかし督師には、自分の幕府の中で、有能な幕僚を朝廷に推薦して官を授ける権限が与えられており、②から①への移行現象は、督師幕府ならではのものであったと思われる。

また①と②の幕僚を確保して督師の任務を円滑に遂行する一方で、清軍が閭近に迫り、時々刻々と戦況が変化していた当時においては、より優秀な者を迅速に見抜いて抜擢し、督師指揮下の地方官（通判や推官など）として組み込む必要があった。ゆえに、地方官の予備軍をプールする目的で礼賢館が設けられたものと考えられる。

史可法幕府の礼賢館に類似するものとして、たとえば第一章で少し触れた督師孫承宗幕府があげられる。⁽⁶⁹⁾この幕府は、史可法幕府より十数年前の天啓年間に存在した。孫承宗幕府にも何名かの幕僚がおり、さらに幕中には六館という館舎が建てられていた。六館とは、孫承宗が人材をあつめるために設けた六つの建物の総称で、孫銓『高陽太傅孫文正公年譜』卷三は、六館について次のように記載する。

天啓三年（一六二三）癸亥、公（孫承宗）六十一歳。公は山海関に出鎮した。…（中略）…六館をたてて天下の豪傑を招いた。一つは占天館、およそ四方四隅の風をうかがい吉凶をうらなう術、三式（雷公・太乙・六壬の術数）に通曉している者。一つは祭地館、およそ敵人の部落がある山川や要害の地の尺度に通じ、陣地を設置したり屯田や水利をおこなう者。一つは訳審館、およそ敵の文字を書き、敵の言語および敵情に通曉している者。一つは偵諜館、およそ知能が優れていて聡く、やすやすと敵の拠点の境界に出入りして、敵の拠点を行き来することができる者。一つは異材劍俠館、およそ才能があつて外国に使いしたり、また劍術が荊聶の流の如き腕前をもつ者。一つは大力捷足館、およそ千斤から六百斤〜七百斤にいたる重いものをひっぱって持ち上げることができ、またひさしの上を飛んで壁を走り、日に数百里を行くことができる者たちが集められた。

天啓三年癸亥公六十一歳。公出鎮山海関。…（中略）…立六館招天下豪傑。一占天館、凡通仰觀風角三式者。一察地館、凡通敵入部落道里山川阨塞安營寨、及屯田水利者。一訊審館、凡識寫敵字通曉敵語、及情者。一偵諜館、凡精敏便利能出入敵境諳敵所往來者。一異材劍俠館、凡材能使外域、及有劍術如荊轲之流者。一大力捷足館、凡力能挽強拳重至千斤或六七百斤、及飛簷走壁日行數百里者。⁽⁷⁾

分野ごとに専門的に占天館・察地館・訊審館・偵諜館・異材劍俠館・大力捷足館の六館が建てられ、占星術師・諜報員・翻訳および通訳・忍術師・剛力などの実務をこなす人材が、それぞれの館に集められていたことがわかる。⁽⁷⁾六館の設置場所は督師孫承宗が駐屯していた山海関であると考えられるが、礼賢館のように、試験の実施や、あるいは館に居た者の人名等の詳細は管見の限り明らかではない。重要なのは、史可法幕府の礼賢館や、孫承宗幕府の六館といった実務要員確保のための館舎が、督師幕府にのみ見られ、督撫幕府には存在しないものであったということである。

では、こうした実務要員プールのための館舎は、なぜ督師幕府にだけ設けられたのだろうか。前述したように、督師に与えられた権限は強く、管轄範囲も広大で、地方の督撫、布政使司、按察使司、都指揮使司、および総兵官系統の武官すべてを傘下におさめた。このようなポストにある督師にとって、それに見合う任務を遂行するには、手元に有能な人材を獲得し、統治下の地域へいかに的確に人材を派遣・配置するかが最も重要で、ゆえに専門の館舎を備え、人材収集をおこなったのだといえる。督師史可法の管轄する範囲は、淮安府・揚州府および四鎮がおさめる地域で、明王朝滅亡寸前の当時、より有能な人材を地方官として官につけ、督師指揮下の地域に置く必要があり、そのために人材確保の場として礼賢館が設置された。

一方、時代は遡るが、天啓年間の督師孫承宗の管轄する山海関および薊州・遼東・天津・登州・萊州においては、南下する清軍をくいとめるため、敵地に潜入して一刻もはやく敵軍の情報を入手する諜報員等の人材が多く必要であり、

ゆえに察地館・偵諜館などの館舎を建てて人材を確保したのである。督師史可法の札賢館と督師孫承宗の六館とでは、具体的な施策は異なるが、時と場所に応じた人材を集めるという点では目的が一致している。つまり、督師の独断で専門の館舎を設けることができ、また督師自身には人材をプールの権限が与えられていたといえる。

ここで、第一章で指摘した何齡修氏の研究の問題点に対する答えを総括したい。まず、幕府人員の役割について見ると、史可法幕府の人員は「書記」・「軍務」・「人材の確保」という三種の幕僚と、地方官予備軍として通判や推官などに就けるために集められた札賢館の人員とに分けられる。さらに幕府人員の定義を明確にすると、「書記」・「軍務」・「人材の確保」を担った三種の人員が幕僚で、札賢館に集められた者は地方官予備軍としての人員であり、幕僚とみなすことはできない。これは孫承宗幕府の六館に集められた者達にも言えることで、かれらは諜報活動等の任務をかせられた人員に過ぎず、幕僚とは言えない。

次に、歴代幕府制度の中における史可法幕府の位置については、以下のような考え方ができる。督師は、明末という危急の時代が要請した職務で、特殊なポストであった。督師指揮下で実務をこなす人材の善し悪しは、当然明王朝の命運を左右するわけで、督師自身の手腕にすべてがかかっていた。明末の混乱した時期であるからこそ、督師幕府は存在し、手元の有能な幕僚には、督師が朝廷に上奏して、兵部職方司主事などの官を授けて重用した。また一方で質の高い地方官予備軍を素早く獲得するためには館舎を置かねばならず、そのため史可法幕府の場合には札賢館が設置された。そうした施策を可能とするだけの権限が、督師には与えられていたのである。その意味では、督師幕府は特殊明末的な幕府であったと考えられる。

おわりに

明末に督師が設置された理由をここで再度まとめておきたい。天啓年間から崇禎年間にかけては、さまざまな問題が同時に勃発し、遼東方面からは清軍の侵攻、李自成・張獻忠などの流賊は、陝西・山西・河北・河南・湖北・湖南など各地へ移動し暴動をくりかえした。清軍の侵攻や流賊の反乱は、すぐさま終息へ向かうものではなく、さらに一箇所が発生したのではないため、討伐対象となる範囲は広く、討伐期間も長期にわたった。このような明末の危急の事態においては、従来の督撫とは異なるもっと強い権限を持った指揮官が必要であり、そのために督師が置かれ、何省にもまたがる広域を統轄して臨機応変に軍を動かし、迅速に事を処理したのである。そうした督師を支えたのが本稿で分析した督師幕府の幕僚たちであり、彼らの役割や位置づけについては本論中で分析したとおりである。ただし督師という存在は、管見の限り清代の史料中には現れず、少なくとも清朝が新たに督師を設置した形跡はまったく見当たらない。その意味では、督師とは明末に特有の存在であったといつてよからう。

一方、明代の督撫は設置以来、存廃を繰り返して明末に至り、これが固定化・制度化へと向かい始めるのは清代乾隆年間（一七三五年～一七九五年）のことである。督撫幕府の研究は、太平天国の乱以降のいわゆる晩清と言われる時期を扱ったものが大半で、清代乾隆年間の督撫幕府は研究されていないのが現状だ。巨大化する晩清の督撫幕府と、乾隆年間の督撫幕府は、構造や幕府構成員の結合原理等が当然異なるものと予想されるが、その研究は目下のところ手付かずの状態にある。

だが、明代に始まる督撫幕府を晩清に向かって通時的に検討しようとするれば、幕府制度が確立したとされる乾隆年間の督撫幕府を無視するわけにはいかない。その際、本稿でみた督師幕府の性質は、乾隆年間の督撫幕府に受け継がれて

いるのか否か。もし受け継がれているのであれば、督師幕府のどのような点が乾隆年間の督撫幕府に組み込まれているのか。⁽⁷³⁾ その点を明らかにするためには、乾隆年間の督撫幕府に焦点をあて、幕府の構造と幕府構成員の結合原理をあらためて分析する必要がある。それらの考察を通して初めて、明代、清代、そして晩清という督撫幕府制度の流れが繋がるとともに、督師幕府の歴史的位置もより明瞭になることだろう。本稿はそのための予備作業と言ってよく、督師幕府の一端を明らかにしたにすぎない。すべて今後の課題として残されたままであることをお断りしておきたい。

註

- (1) 方建春「秦漢時期幕府制度的形成」『寧夏社会科学』二〇〇五年第六期などを参照。
- (2) 方建春「論魏晉南北朝時期的幕府制度」『寧夏社会科学』二〇〇六年第六期などを参照。
- (3) 石雲濤「唐代幕府制度研究」(中国社会科学出版社、二〇〇三年)、程遂營「五代幕府文職僚佐」(『南都学壇』二〇〇一年第五期)などを参照。
- (4) 周国平・張春生「宋代幕府的發展述論」『河北大学学报』二〇〇四年第五期などを参照。
- (5) 張躍銘「略論郝桂」『内蒙古社会科学』一九八一年第五期などを参照。
- (6) Folsom, Kenneth E., Friends, Guests, And Colleagues: The Mu-Fu System in the Late Ch'ing Period, University of California Press, 1968。(訳書は、K・E・福爾索姆『朋友・客人・同事：晩清幕府制度研究 中国近代史研究訳叢』中国社会科学出版社、二〇〇二年)において、明清時代の幕府はそれ以前の幕府とは異なり、純粹に私的な性格を持ち、政府とは関係がないものであると述べているが、明代幕府の分析は行なっていない。ほかには、牛秋実『李鴻章幕府』、張学繼『袁世凱幕府』、劉建強『曾国藩幕府』、黎仁凱『張之洞幕府』(以上、『晩清四大幕府叢書』、中国广播電視、

二〇〇五年）などを参照。

(7) 前掲註6を参照。

(8) 繆全吉『清代幕府人事制度』中国人事行政月刊社、一九七一年。

(9) 『故宫博物院刊』二〇〇六年第五期。

(10) 北京大学出版社、二〇〇六年。

(11) 『皖西学院学报』二〇〇一年第一期。

(12) 『中国史研究』二〇〇一年第二期、のち『明代儒学生員与地方社会——社科学術文庫』、中国社会科学、二〇〇五に収録。

(13) 『滁州学院学报』二〇〇八年第四期。

(14) 『史窓』第六十七号、二〇一〇年。

(15) たとえば唐代の節度使、觀察使などを指す。使職については、寧志新『隋唐使職制度研究』（中華書局、二〇〇五年）などの研究を参照。

(16) 辟召については、礪波護『中世貴族制の崩壊と辟召制——牛李の党争を手がかりに——』（『東洋史研究』第二一卷第三号、一九六二年）、礪波護『唐代使院の僚佐と辟召制』（『神戸大学文学部紀要』第二号、一九七二年）などの研究がある。また郭潤涛『中国幕府制度的特徴、形態和変遷』（『中国史研究』一九九七年第一期）では、「幕僚制Ⅱ辟召制」から「幕友制Ⅱ招聘制」へという図式を提示し、その転換を明代に求めようと試みたが、あまりに機械的な理解となっている。

(17) 明代の総督・巡撫に関する研究には、奥山憲夫『明代巡撫制度の変遷』（『東洋史研究』第四五卷、一九八六年。のち『明代軍政史研究』汲古書院、二〇〇三年に収録。）、郭紅等著『中国行政区劃通史・明代卷』（復旦大学、二〇〇七年）、靳潤成『博士論文叢書 明朝総督巡撫轄区研究』（天津古籍出版社、一九九六年）、栗林宣夫『明代巡撫制度の成立に就て』（『史

「潮」第十一年第三号、一九四一年）、張哲郎『明代巡撫研究』（文史哲出版社、一九九五年）、本橋大介「明・正統年間における総督軍務の職掌」（『大学院年報』第二十二号、二〇〇四年）、同「明代成化年間における総督軍務の地方常設——常設の嚆矢としての総督兩江軍務を中心に——」（『立正大学東洋史論集』第十七号、二〇〇五年）、同「明代中期における総制陝西三辺軍務の常設」（『明代中国の歴史的位相：山根幸夫教授追悼記念論叢』汲古書院、二〇〇七年）などがある。

(18) 陳宝良『明代幕賓制度初探』（『中国史研究』二〇〇一年第二期）

在地方衙門、上督師・経略・総督・巡撫、下至府・州・県各衙門、均聘幕賓、甚至武將・軍衛也有聘幕賓者。督師開府一方、自辟幕府、在明末常見其例。如孫承宗督師、專設占天・察地・訳審・偵諜・異材劍・大力六館、招聘天下豪傑。其中入幕最著名者、当数諸生茅元儀、他充賛画、留幕中。史可法督師、開府揚州、曾設礼賢館、招四方智謀之士及通曉天文・陰符・遁甲諸術者、一時幕客叢集、人材濟濟。

(19) 孫承宗は高陽（河北省保定市）の人で、字は稚繩、号は愷陽、万曆三十二年の進士。嘉靖四十二年に生まれ、崇禎十一年に世を去る。天啓二年、六十歳という高齢にもかかわらず兵部尚書兼東閣大学士の身分で対清軍の督師になる。

天啓二年八月から天啓五年九月までの約四年間山海関に駐屯し、山海関および薊州・遼東・天津・登州・萊州の軍務を監督する督師として遼東防衛を指揮した（孫承宗『閔閑奏稿』巻一、天啓二年、同『督師奏疏』巻一、天啓二年、『明熹宗実録』天啓二年八月乙酉）。これが第一次幕府期間である。病氣療養を理由に天啓五年に一旦職を退くが（『明熹宗実録』天啓五年九月丙午）、崇禎二年十一月、六十七歳の孫承宗は再び呼び戻されて督師に再任し、これが第二次幕府期間となる。このときは少師兼太子太師、吏部尚書、中極殿大学士兼兵部尚書として通州（河北省北京市）や山海関に駐屯した（『崇禎長編』巻二十八、崇禎二年十一月辛卯、陳濟生『天啓崇禎兩朝遺詩』小伝、孫文忠公、『明史』巻二百五十、孫承宗伝）。孫承宗に関する研究には、楊延欣『大学士孫承宗』（中国社会科学出版社、二〇〇六年）、余三東『孫承宗保衛北京述論』（『北

京社会科学』一九九四年第三期）など多数ある。また孫承宗の身近で活躍した人物に焦点をあてた盧子震「鹿善繼評伝」〔河北大学学报〕一九八五年第三期）、孔德麒「車營叩答合編」初探〔軍事歷史研究〕一九九〇年第二期）などの研究もあるが、幕府や幕僚といった観点からの研究ではない。

(20) 『燕京學報』一九九七年第三期～一九九八年第四期。

(21) 『江海學刊』二〇〇二年第四期。

(22) 史可法に関する研究には、夏元「史可法死守揚州」〔南京師範大學文學院學報〕一九九九年第十二期）、吳蔚「史可法与揚州十日」〔党政幹部文摘〕二〇〇六年第三期）、張建安「史可法在南明的兩難境地」〔史海鉤沉〕二〇〇九年第十一期）などがあるが、夏元氏、吳蔚氏、張建安氏はみな参考史料・参考文献の提示をしておらず不鮮明な点が多い。

(23) 督師については、拙稿「明末の督師と経略——督撫制度との関わりから見た」〔洛北史學〕第十三号、二〇一一年に掲載予定）を参照。

(24) 『楊嗣昌集』岳麓書社、二〇〇五年。

(25) 高陽孫承宗「督師奏疏」卷一、奏為経略遼難得人願請身親督理関城兵務事〔中国文献珍本叢書〕、全国図書館文献縮微復制中心、二〇〇七年）、『明熹宗実録』天啓二年八月乙酉、『明史』卷二百五十、孫承宗伝。

(26) 吳廷燮「明督撫年表」〔二十四史研究資料叢刊〕、中華書局、一九八二年）。

(27) 尚方劍についての研究は、趙中男「明代宮廷典制史」下巻、第十章、巡守、監国与軍礼〔明代宮廷史研究叢書〕、紫禁城出版社、二〇一〇年）、柏樺「明代賜尚方劍制度」〔古代文明〕二〇〇七年第四期）などを参照。

(28) 史元慶「史可法先生年譜」卷一、万曆三十年至天啓七年〔華欣叢書〕廿五、華欣文化事業中心、一九七九年）。

(29) 前掲、『史可法先生年譜』卷二、崇禎元年至崇禎十三年。

(30) 『史可法集』台湾商務印書館発行、一九七四年、『明史』卷二百七十四、史可法伝。

(31) 前掲註28参照。

(32) 黄開華『明史論集』二、補明史南京七卿年表（開發印務公司、一九七二年）、前掲『史可法先生年譜』卷三、崇禎十四年至十六年。

(33) 前掲、『史可法先生年譜』卷四、崇禎十七年正月至十二月。

(34) 応廷吉『青燐屑』上巻（『台湾文献史料叢刊』大通書局、一九八七年）

五月、閣臣高弘図、枢臣史可法、督臣馬士英、内監韓贊周、盧九德、科臣李沾、台臣左光先等共擁福藩世子正位南京、改元弘光、遣臣分道安撫天下、從龍定策諸臣進位有差。

(35) 崇禎十七年五月、朝廷で誰を出鎮させるか議論になった際、馬士英は出鎮を望まず、史可法を朝廷から出すように仕向けた。そのときのことを応廷吉『青燐屑』上巻は、「上命諸臣集議、誰任居守、誰任督守。内監韓贊周言於衆曰、馬相公才大略、堪任督師。史相公安靜寧一、堪任居守。士英不樂出鎮、辞曰、吾往歲擒劉超・服老回回、多負勤苦、筋力憊矣、無能為也。史老先生、鎮撫皖城、屢建奇績、目今番山鶴已至淮南、淮安士民仰公盛德、不啻明神慈父。督是師者、非公而誰。」と記載している。

(36) 兼掌という記載は史料中に確認でき、内閣大学士と六部尚書の兼掌は嘉靖年間ころから見られる。ほかに嘉靖年間の嚴嵩は武英殿大学士と礼部尚書（八ヶ月間）、徐階は東閣大学士と礼部尚書（一ヶ月間）、崇禎年間の楊嗣昌は東閣大学士と兵部尚書（十五ヶ月間）といった例がある。内閣大学士の兼掌については、譚天星『明代内閣政治』（中国社会科学出版社、一九九六年）一〇六頁―一一四頁、楊維波『明代閣權与部權之爭歴史軌跡』（『上海師範学院学报』、二〇〇九年第一期）などを参照。

(37) 談遷『棗林雜俎』仁集、逸典、史相國督師（『元明史料筆記叢刊』、中華書局、二〇〇六年）

鳳督馬士英扶迎鑾之功、自江北來朝、不欲出鎮。故事、輔臣必有人閣辦事之旨。士英特繫銜大學士、非內任、竟擬政府。史相國度不能外、自請出鎮。鑄督師輔臣之印。

(38) 前掲、応廷吉『青燐屑』上卷

願受命。越數日、遂進太子太保、兵部尚書、武英殿大學士、視師淮揚。朝議既定、以史公督師淮揚。

(39) 溫睿臨『南疆逸史』卷五、列伝第一、史可法（『晚明史料叢書 七種』、大安、一九六七年）

可法語大兵曰、我史閣部也。

(40) 前掲、『史可法先生年譜』卷五、弘光元年正月至四月。

(41) 『清世祖實録』順治二年五月己酉

二十八日多鐸等奏報、四月二十五日、令拜尹圖、図頼、阿山等攻克揚州城、獲其閣部史可法、斬于軍前。

(42) 前掲、『史可法先生年譜』卷五、弘光元年正月至四月。

(43) 前掲、『史可法先生年譜』卷五、明唐王隆武元年、丙戌

贈公太師、諡忠靖。

(44) 前掲、『史可法先生年譜』卷五、清乾隆四十一年、壬午

正月、清廷賜公諡忠正、建祀立碑、題像賦詩、倍極哀榮。

(45) 計六奇『明季南略』卷一、史可法請設四鎮（『中国史学基本典籍叢刊』中華書局、二〇〇六年）。

(46) このほかに韓默という人物（陳鼎『留溪外伝』卷一、忠義部上、韓義士伝に「聞默賢、以礼致幕中、属以筆札。」とある）も「書記」の役割を担っている。

(47) 『光緒塩城県志』 卷十、人物、王之楨（『中国地方志集成』江蘇古籍出版社、一九九一年）。

(48) 歐陽憲万は『江西通志』 卷七十、人物五、南昌府五（『文淵閣四庫全書』 収載）に「歐陽斌元、字憲万、新建人。…（中略）…」。又嘗佐督師史可法幕府、可法特薦推官贊画。」とある。

(49) 前掲、『史可法集』 卷三、書牘、復撰政王、崇禎十七年甲申九月十五日。

(50) 何齡修「史可法揚州督師期間の幕府人物（上）」『燕京學報』、一九九七年第三期、一七五頁～一七六頁。

(51) 『乾隆江南通志』 卷一百四十一、人物志、官績（『文淵閣四庫全書』 収載）

包爾庚、字長明、華亭人。明季、以進士知広東羅定州。

(52) 談遷『棗林雜俎』 仁集、逸典、寓書史可法（『元明史料筆記叢刊』、二〇〇五年）。

(53) 鄧之誠「清詩紀事初編」 卷二、前編下、李標（中華書局、一九六五年）。

(54) 応廷吉『青燐屑』 上卷

閣部請印七顆、設督餉道員一顆、以原任副使黃鉉掌之。監軍道印一顆、以原任副使高岐鳳掌之。行軍兵部職方司郎中一顆、以黃日芳掌之、同其官者為秦士旂、主事何剛、施鳳儀等。監餉同知一員、以知県吳道玉署之、無印。監紀推官印一顆、先後掌其印者為原任僉事陸遜之、原任知県応廷吉、同其官者為劉景綽・梁以樟・呂彦良等、從征立功為原任翰林院庶吉士吳爾璵、滁泗兵備石啓明・開（封）府推官李長康・贊画通判張鐸・知県殷垵・支益等、參贊等官不及備載、侯方岳後至、以為桃源知県。督師大庁副總兵印一顆、以李正春掌之。督師中軍旗鼓印一顆、以馬応魁掌之、同其官者為翟天葵・陶正明等。督師前軍商功參將一顆、以汪一誠掌之。……（後略）。

(55) 「軍務」を担ったと考えられる幕僚は、ほかには殷銘（鄧之誠「清詩紀事初編」 卷二、前編下、李応機に「殷君方束髮、時亦從師至、贊画參樞機、入幕寄心膂。」）、王綱（『同治饒州府志』 卷二十一、人物志五、文苑、王綱に「閣部史可法聞其名、

走書聘至幕內、參預機務。）、王佐（談遷『國權』卷一百四、弘光元年「督師大學士史可法奏、王佐冒險歸徐、請留營中備咨謀。從之。」）、王廷宰（朱彝尊『靜志居詩話』卷十九、王廷宰に「度〔渡〕淮、參史可法軍事。」）、紀克明（溫睿臨『南疆逸史』卷五、列伝第一、史可法応廷吉に「劉湘客・張鐸、紀克明等並在幕府。」）、吳爾壘（婁東梅村野史『鹿樵紀聞』卷上、史可法殉揚に「謁可法、請從贖罪、可法留參軍事。」）、周君調（黃宗羲『南雷詩文集』上、寿序類、顧君樂生六十寿序に「君調固奇士、嘗參史閣部軍事。」）、張璠若（陳去病『五石脂』に「以布衣參公軍。」）、自称參軍門人。）、彭士望（孫靜菴『明遺民錄』卷二十七、彭士望に「尋參揚州軍幕。」）、李昇（楊鳳苞『南疆逸史跋』下に「昇乃往參可法軍事。」）、劉湘客（查繼佐『國寿錄』卷四、便記、見聞雜記「督師大學士史可法薦劉湘客贊画。」、江左樵子『樵史通俗演義』第三十九回、左將軍檄文討逆、史閣部血淚誓師に「史可法咬指出血、写血書一紙、令咬參謀劉湘客咬星夜進京。」）などの人物がいる。

(56) 『清史稿』卷五百、遺逸一、閻爾梅伝（中華書局、一九八六年）。

(57) 屈大均『皇明四朝成仁録』名人類三十八、（『明代伝記叢刊』明文書局、一九九一年）。

(58) 『道光桐城統修臬志』卷十、人物志、忠節、朱良諫（『中国方志叢書』、成文出版社、一九七五年）。

(59) 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十一、殉君伝、倪元璐（『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八七年）
於是特拳監生蔣臣為戶部司務、監制錢鈔。

(60) 朱彝尊『靜詩居志話』下、人民文学出版社、一九九〇年。

(61) 『光緒嘉定臬志』卷十七、人物志二、忠節、施鳳儀（『中国地方志集成』、上海書店、一九九一年）。

(62) 前掲註54参照。

(63) 前掲、『青燐屑』下卷。

(64) 前掲、『青燐屑』上卷

七月、安撫浙江監察御史左光先疏薦原任徐州碭山知果應廷吉於朝、有三式之學皆精、天官之微更悉、臣與久処、信而有徵、所当投大遺艱、究其底蘊等語。部覆授廷吉淮安府推官、閣部具疏請之、奉旨、廷吉即以淮安府推官職銜、閣部軍前効用。

(65) 前掲註54参照。

(66) 前掲、『青燐屑』上巻

〔崇禎十七年十一月〕次日、抵白洋河、令廷吉監劉肇基本軍、高岐鳳監察李栖鳳軍進取宿遷。

(67) 前掲、『青燐屑』下巻

〔弘光元年二月〕総河王鉄山、総漕田百源深以為憂、且慮高兵橫軼、令兼屯田僉事監紀推官應廷吉持節安撫、而史公令箭適至、遂並行焉。

(68) 『明史』巻二百七十四、史可法伝にも「〔崇禎十七年六月〕開札賢館、招四方才智、以監紀推官應廷吉領其事。」とあり、同様の記載がある。應廷吉『青燐屑』上巻においても、「〔崇禎十七年十一月〕鹵簿所至、凡一技一能欲効用者皆投策進見、隨試隨収、月有廩餼。以推官應廷吉董其事、命曰札賢館。」とあるが、札賢館を開いた時期が数ヶ月もずれている。『史可法集』は五月、『明史』は六月で、時間にあまり差がない。しかし『青燐屑』では十一月となっており、時間的に十一月というのは遅すぎると考えられ、本稿では五月〜六月あたりに札賢館が開かれたという『史可法集』、『明史』の記載にしたがう。

(69) 前掲註19参照。

(70) 孫銓『高陽太傅孫文正公年譜』巻三（于浩輯『明代名人年譜』北京図書館出版社、二〇〇六年）。

(71) 孫承宗は天啓・崇禎年間の二度、督師となっているが、六館の設置は管見の限り天啓年間のみで、崇禎年間には確認できない。六館設置に関しては、周文郁『辺事小紀』巻一、遼西復守紀事（『歴代辺事資料輯刊』、北京図書館出版社、二〇〇五年）、陳鼎『東林列伝』巻六、孫承宗伝（新文豊出版社、一九七五年）、茅元儀『督師紀略』巻二（北京図書館

古籍珍本叢刊』、においてもほぼ同様の記載がある。

(72) 錢謙益『列朝詩集小伝』丁集中、少師孫文正公承宗（上海古籍出版社、一九八三年）

天啓二年、拜兵部尚書、入直內閣、兼理部事、奉命督師、出鎮山海、凡四年、予歸里。

(73) 明代の督師の性格が一部清代の督撫に繼承されていることについては、註(23)の拙稿「明末の督師と経略——督撫制度との関わりから見た」を参照。

表 (礼賢館の人物) ※五十音順

番号	姓名	出身	身分	礼賢館の士であったことを示す史料	活動内容	活動内容を示す史料	生没年とそれを示す史料	備考
1	何臨	山陽 (江蘇省 淮安市)	候選知県(礼賢館に入る以前から候選知県であつたのか、礼賢館に入つて以後、候選知県の身分になつたのかは不明。)	礼賢館の士であつたことを示す史料	不明	不明	・生年は不詳。 ・没年は弘光元年頃。	
				<p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』巻十二、殉伝、史可法、附伝〔明末清初史料選刊〕、浙江古籍出版社、一九八七年。</p> <p>〔日本語訳〕 盧涇材、字は渭生、長洲の人。帰昭、字は爾徳、昆山の人。張演、字は凝之、嘉定の人。胡如桂、胡如瑾、桐城の人。何臨、山陽の人。皆、史可法の礼賢館の士であつた。</p> <p>〔原文〕 盧涇材、字渭生、長洲人。帰昭、字爾徳、 昆山人。張演、字凝之、嘉定人。胡如桂、 胡如瑾、桐城人。何臨、山陽人。皆史可 法礼賢館士也。</p> <p>〔史料名〕 李天根『燭火録』下、巻十、乙酉(明末清初史料選刊、浙江古籍出版社、一九八六年)。</p> <p>〔日本語訳〕 同じように城で死去した者には、また兵科の施鳳儀、督餉鐵事の黄鉉、候選知県の胡如瑾・何臨がいた。</p> <p>〔原文〕 同城殉難者、又有兵科施鳳儀、督餉鐵事黄鉉、候選知県胡如瑾・何臨。</p>	不明	不明	<p>〔史料名〕 李天根『燭火録』下、巻十、乙酉〔明末清初史料選刊、浙江古籍出版社、一九八六年〕。</p>	

2	婦昭	崑山 (江蘇省蘇州市)	<p>生員。のちに通判・推官。知県のいづれかの官を授かる。</p> <p>〔史料名〕 『明史』卷二百七十四、史可法</p> <p>〔日本語訳〕 〔史可法は〕上奏して婦昭等二十余人には通判・推官、知県を授けた。</p> <p>〔原文〕 而擬授婦昭等二十余人為通判・推官。知県。</p>	<p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十二、殉福伝、史可法、附伝（『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八七年）。</p> <p>〔日本語訳〕 盧涇材、字は渭生、長洲の人。婦昭、字は爾德、崑山の人。張涵、字は凝之、嘉定の人。胡如桂、胡如瑾、桐城の人。何臨、山陽の人。皆史可法の礼賢館の士であつた。</p> <p>〔原文〕 盧涇材、字渭生、長洲人。婦昭、字爾德、崑山人。張涵、字凝之、嘉定人。胡如桂、胡如瑾、桐城人。何臨、山陽人。皆史可法礼賢館士也。</p>	<p>揚州城の門を 守備</p>	<p>〔史料名〕 〔欽定勝朝殉節諸臣録〕卷十（『文淵閣四庫全書』収載）</p> <p>〔日本語訳〕 生員の婦昭は、崑山の人である。史可法幕府に在って、守揚州（城）の西門を守つてここで死去した。</p> <p>〔原文〕 生員婦昭、崑山人。在史可法幕府、守揚州西門死之。</p>		
---	----	----------------	---	--	----------------------	---	--	--

3				
胡如瑾				
桐城 (安徽省 桐城市)				
候選知県				
<p>(史料名) 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十二、殉福伝、 史可法、附伝(『明末清初史料選刊』、浙 江古籍出版社、一九八七年)</p> <p>(日本語訳) 盧涇材、字は渭生、長洲の人。帰昭、字 は爾徳、昆山の人。張涵、字は凝之、嘉 定の人。胡如桂、胡如瑾、桐城の人。何臨 山陽の人。皆、史可法の礼賢館の士であつ た。</p> <p>(原文) 盧涇材、字渭生、長洲人。帰昭、字爾徳、 昆山人。張涵、字凝之、嘉定人。胡如桂、 胡如瑾、桐城人。何臨、山陽人。皆史可 法礼賢館士也。</p>	不明	不明	<p>・生年は不詳。 ・没年は弘光元年頃。</p> <p>(史料名) 李天根『燭火録』下、 卷十、乙酉(『明末清 初史料選刊』、浙江古 籍出版社、一九八六年)。</p>	胡如桂の兄 弟。

4		<p>胡如 姓(胡)桐 (安徽省 桐城市)</p>	<p>諸生。功績によつて、のち司理参軍となる(『道光桐城統修県志』卷十、人物志、忠節、胡如程)。</p>	<p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十二、殉福伝、史可法、附伝(『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八七年) 〔日本語訳〕 盧涇材、字は渭生、長洲の人。帰昭、字は爾德、昆山の人。張涵、字は凝之、嘉定の人。胡如銓、胡如璫、桐城の人。何臨、山陽の人。皆、史可法の札賢館の士であつた。 〔原文〕 盧涇材、字渭生、長洲人。帰昭、字爾德、 昆山人。張涵、字凝之、嘉定人。胡如銓、 胡如璫、桐城人。何臨、山陽人。皆史可 法札賢館士也。</p>	<p>・記室</p>	<p>〔史料名〕 『道光桐城統修県志』 卷十、人物志、忠節、 胡如程(『中国方志 叢書』、成文出版社、 一九七五年)。 〔日本語訳〕 〔史可法は〕招いて記 室とし、露布(封のし ていない上奏文)封事 (封のしてある上奏文) は、みなその手からで た。功績によつて司理 参軍を授けた。 〔原文〕 辟為記室、露布封事、 尽出其手、叙功授司理 参軍。</p>	<p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』 卷十二、殉福伝、史可 法、附伝(『明末清初 史料選刊』、浙江古籍 出版社、一九八七年)。 ・生年は不詳。 ・没年は弘光元年頃。</p>	<p>〔史料名〕 『乾隆江都 県志』卷 十九、人物 志、忠節、 胡如理 〔日本語訳〕 史可法のす ぐれた弟子 である。 〔原文〕 史可法高弟 也。</p>
---	--	---------------------------------------	--	---	------------	--	--	---

5			
凱 孫 元			
崑 蘇 山 州 府			
諸 生			
<p>〔史料名〕 応廷吉『青樓閣』下巻（『台湾文献史料叢刊』第六輯、台湾大通書局、一九八七年）。</p> <p>〔日本語訳〕 よって（弘光元年）四月二日において、督撫の衙門の左わきの部屋で礼賢館の諸士を試験した。合格した嘉禾の帰昭、崑山の孫元凱を甲、乙とし、ならびに唐大章・唐妍・張大武・陸燧等には通判、推官・知県等の官を授けた。</p> <p>〔原文〕 因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱為甲乙、並授唐大章・唐妍・張大武・陸燧等通判・推官・知県等官。</p>			
	・軍事に ・参与 ・献策		
<p>〔史料名〕 『光緒崑新両県統修合志』卷三十一、文苑二、孫元凱、国朝（『中国地方志集成』、江蘇古籍出版社、一九九一年）。</p> <p>〔日本語訳〕 史可法が揚州に幕府を開くと、（孫元凱を）招いてその軍に参加させた。（孫）元凱は兵事七策を著した。</p> <p>〔原文〕 史可法開府揚州、辟參其軍。元凱著兵事七策。</p>			
	不明		

8	7
唐妍	武張大
不明	不明
<p>不明だが、弘光元年に礼賢館の諸士を試験した際、通判・推官・知県などの何らかの官を授かっている（応廷吉『青燐屑』下巻）。</p>	<p>不明だが、弘光元年に礼賢館の諸士を試験した際、通判・推官・知県などの何らかの官を授かっている（応廷吉『青燐屑』下巻）。</p>
<p>（史料名） 応廷吉『青燐屑』下巻（『台湾文献史料叢刊』第六輯、台湾大通書局、一九八七年）。</p> <p>（日本語訳） よって（弘光元年）四月二日において、督撫の衙門の左わきの部屋で礼賢館の諸士を試験した。合格した嘉禾の帰昭、崑山の孫元凱を甲、乙とし、ならびに唐大章・唐妍・張大武・陸燧等には通判、推官・知県等の官を授けた。</p> <p>（原文） 因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱為甲乙、並授唐大章・唐妍・張大武・陸燧等通判・推官・知県等官。</p>	<p>（史料名） 応廷吉『青燐屑』下巻（『台湾文献史料叢刊』第六輯、台湾大通書局、一九八七年）。</p> <p>（日本語訳） よって（弘光元年）四月二日において、督撫の衙門の左わきの部屋で礼賢館の諸士を試験した。合格した嘉禾の帰昭、崑山の孫元凱を甲、乙とし、ならびに唐大章・唐妍・張大武・陸燧等には通判、推官・知県等の官を授けた。</p> <p>（原文） 因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱為甲乙、並授唐大章・唐妍・張大武・陸燧等通判・推官・知県等官。</p>
不明	不明
不明	不明
不明	不明

10	9
陸燧	唐大章
不明	不明
<p>不明だが、弘光元年に礼賢館の諸士を試験した際、通判、推官、知県などの何らかの官を授かっている（応廷吉『青燐屑』下巻）。</p>	<p>不明だが、弘光元年に礼賢館の諸士を試験した際、通判、推官、知県などの何らかの官を授かっている（応廷吉『青燐屑』下巻）。</p>
<p>（史料名） 応廷吉『青燐屑』下巻（『台湾文献史料叢刊』第六輯、台湾大通書局、一九八七年）。</p> <p>（日本語訳） よって（弘光元年）四月二日において、督撫の衙門の左わきの部屋で礼賢館の諸士を試験した。合格した嘉禾の帰昭、崑山の孫元凱を甲、乙とし、ならびに唐大章・唐妍・張大武、陸燧等には通判、推官、知県等の官を授けた。</p> <p>（原文） 因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱為甲乙、並授唐大章・唐妍・張大武・陸燧等通判・推官、知県等官。</p>	<p>（史料名） 応廷吉『青燐屑』下巻（『台湾文献史料叢刊』第六輯、台湾大通書局、一九八七年）。</p> <p>（日本語訳） よって（弘光元年）四月二日において、督撫の衙門の左わきの部屋で礼賢館の諸士を試験した。合格した嘉禾の帰昭、崑山の孫元凱を甲、乙とし、ならびに唐大章・唐妍・張大武、陸燧等には通判、推官、知県等の官を授けた。</p> <p>（原文） 因於四月二日、於督撫左廂策試諸士、第嘉禾帰昭、崑山孫元凱為甲乙、並授唐大章・唐妍・張大武・陸燧等通判・推官、知県等官。</p>
不明	不明
不明	不明
不明	不明

11	盧渭	長洲 江蘇省 蘇州市	歲貢生
<p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十二、殉福伝、史可法、附伝(『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八七年)。</p> <p>〔日本語訳〕 盧涇材、字は渭生、長洲の人。帰昭、字は爾徳、昆山の人。張涵、字は凝之、嘉定の人。胡如桂、胡如璩、桐城の人。何臨、山陽の人。皆史可法の札賢館の士であつた。</p> <p>〔原文〕 盧涇材、字渭生、長洲人。帰昭、字爾徳、昆山人。張涵、字凝之、嘉定人。胡如桂、胡如璩、桐城人。何臨、山陽人。皆史可法札賢館士也。</p> <p>〔史料名〕 『明史』卷二百七十四、史可法</p> <p>〔日本語訳〕 渭、字は渭生。長洲の諸生である。(史)可法が淮安府・揚州府に出鎮したとき、(盧)渭等は宮殿の門で伏して上書し、言うことには、秦檜が内に在り、李綱が外に在ったから、宋は結局南遷したのだと、(しかしこの上書は)受け入れられなかった。(盧渭は)札賢館に居ることが久しかった。可法は渭の才能によって、渭を歳貢生に合格させ、官につけるということになったが、(盧渭は)職を受けなかった。</p> <p>〔原文〕 渭、字渭生、長洲諸生。可法出鎮淮・揚、渭等伏闕上書、言、秦檜在內、李綱居外、宋終北轅。不納。居札賢館久、可法才渭、渭方歲貢、當得官、不受職。</p>			
<p>〔史料名〕 『馮夢龍全集』第十一卷(鳳凰出版社、二〇〇七年)。</p> <p>〔献策したもの〕 「上史大司馬南都切計十策」。 「上太司馬東南權機四策」。</p> <p>〔史料名〕 『馮夢龍全集』第七卷(鳳凰出版社、二〇〇七年)。</p> <p>〔檄文「殺賊誓言」〕 李天根『燭火録』下、卷十、乙酉(『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八六年)。</p> <p>〔日本語訳〕 渭の字は渭生で、歳貢になつて職につくことになつたが、故意に職を受けず、ながく札賢館に居た。史可法はその才能によって、鈔関を監守することを命じた。(最後は)河に身を投げて死去した。</p> <p>〔原文〕 渭字渭生、以歲貢當得官、故不受職、久居札賢館、史可法才之、命監守鈔関、投于河。</p>			
<p>・生年は不詳。</p> <p>・没年は弘光元年頃、河に身を投げて死去。</p> <p>〔史料名〕 徐秉義『明末忠烈紀実』卷十二、殉福伝、史可法、附伝(『明末清初史料選刊』、浙江古籍出版社、一九八六年)。</p> <p>〔日本語訳〕 渭の字は渭生で、歳貢になつて職につくことになつたが、故意に職を受けず、ながく札賢館に居た。史可法はその才能によって、鈔関を監守することを命じた。(最後は)河に身を投げて死去した。</p> <p>〔原文〕 渭字渭生、以歲貢當得官、故不受職、久居札賢館、史可法才之、命監守鈔関、投于河。</p>			